現代アメリカ語の用法（訳）

沢　田　照　徹

（1）

不定詞（Infinitive）

不定詞とは，誰によって，いつ，どうゆう仕方で，その動作が起るかというような他の特殊条件を全く付けずに，単に動詞の動作を指示すところの動詞の形態である。動詞のそのような形態は，動詞の他の形態と異なり，総てそのような諸条件の制扼を受けないという理由で不定詞（an infinitive）と呼ばれる。

若し或る動詞が他動詞で，例えば he makes music（彼は作曲家だ）というような句の中で動詞が目的語を必要としているように，その意味を完結させるため目的語を必要とするならば，to make music（作曲をする）という句の中で見られるように，その不定詞もまた目的語を必要とするであろう。有主格動詞形態（finite verb forms）と同様に，不定詞は形容詞によってではなく副詞によって修飾されるが，それは文の中で恰も名詞であるかのように働く。歴史的に言えば，不定詞は make や go のように単一語である。それは例えば he must go や he did go に見られるように，動詞の目的語として用いられ，また前置詞 to の目的語として用いられる。古代英語では不定詞は当時の使用の約25％まで前置詞 to の目的語として用いられた。今日では不定詞はその使用の80％以上にも及んでこの用法で用いられている。

（文法家のうちには，to が先行する不定詞を，裸不定詞（bare infinitive）と区別するため，“the supine”〔s(j)ú : pain〕（動状詞名詞）と呼んでいる者もある。）

現代英語では裸不定詞は do, let の後, will, can, must のような正規の助動詞の後, また受動態でなく能動態の中で bid, dare, feel, hear, make, need, see の後で用いられる。或る構文の中, または或る意味を含んで have, help, find, come, go, run, try の後, また時には behold, mark, observe のような "see" という意味を持った他の動詞の後で用いられる。to- 不定詞は助動詞 ought, used や, また或る意味を含んで be, have の後で用いられる。そして独立した動詞を含む他の総ての構文の中で用いられる。to という語は, 例えば she refused to eat, talk, or move のような連続した数個の不定詞ではその何れの不定詞にも結びつき, また he would like to の中で見られるように, 文脈から容易に補なうことのできる不定詞を代表することができる。

18世紀の文法学者達は彼等の問題を解くのに研究にたよるより寧ろ論理にたよっていたので不定詞の前にある to という語を説明するのに苦しんだ。to は副詞であるという者, 助動詞であるという者, あるいは多義冠詞 (an equivocal article) であるという者などさまざまであった。実際は「～の方向に」(in the direction of) を第一義とする単純前置詞の to なのである。それは he was led to believe (彼は信じたいような気になった) に見られるように最初は意図もしくは目的を示すため不定詞と共に用いられた。然しながらこの構文はこの用法の範囲を遙かに越えて用いられるようになり, 今日では屢々この to は不定詞記号 (the sign of the infinitive) 即ち次に続く語が不定詞であることを示す接頭辞にすぎない。とはいえ文法的には to と後の動詞との 2 語は今日なお前置詞句を形成し, かつ前置詞句 (prepositional phrase) として取扱われている。

この to が前置詞として説明されようが, 助動詞として, 副詞として, 乃至は多義冠詞として説明されようが, who dared to nobly stem tyrannical pride (誉れ高くも暴君の傲慢さをへし折る勇気があったところの) に見られるように, それと不定詞との中間に修飾語が入らないという理由はない。修飾語が入るか入らないかは論理の問題ではなく嗜好の問題である。

不定詞によって指示される動作を行う主体は, there is no need for him to come（彼がやってくる必要はない）の him のように不定詞の主語と呼ばれる。非常に屢々この例の中でのように，主語は for によって導入される。このことは或る状況の下では認め得るが，他の状況の下では認められない。規則としては不定詞の主語は動詞または前置詞の目的語であるが，それはまた he was heard to say（彼が言うのが聞かれた）の中の he のように受動態動詞の主語ともなることができる。この事実は to be の後に続く人称代名詞の格に恐らく影響を与えたのだろうが(*)，然しそれ以外は重要な問題ではない。

（* to be の主語が，動詞または前置詞の目的語である場合には，I took it to be him（私はそれが彼だと思った）に見られるように，to be の後に続く人称代名詞は目的格形態をとらねばならないし，また to be の主語が，同時に動詞の主語でもある場合には，to be の後に続く人称代名詞は，it was thought to be he に見られるように，主格形態をとるであろう。）

不定詞の用法（Use of the Infnitive）

不定詞句は，名詞・代名詞を修飾する形容詞として働き，そしてそれがそのように働く時には the first to come（最初にやってくる人）や，the last to leave（仲々去りそうもない人）に見られるように，不定詞はそれが修飾する語の後に従う。不定詞はまた副詞句として働くこともできる。一般的に言って，それは she looked down to blush and she looked up to sigh（彼女は うつむいて顔を赤らめウナジを上げてため息をついた）や，I come to bury Caesar, not to praise him（私はシーザーを讃えるためにきたのではなく，彼を埋葬するためにやってきたのだ）の中で見られるように，目的の副詞である。然しそれは原因・結果・必要その他類似の観念を表わすこともできる。不定詞はまた名詞として用いられる。それは where but to think is to be full of sorrow（考えることが悲歎に暮れることでしかない場合に）の中で見られるように，動詞の主語となり，動詞 to be の補語となることができる。乃至はそれは learn to lalor and to wait（働いて然る後待つことを知れ）の中で見られるよう

に，ある種の動詞の直接目的語ともなり得る。

これらのいろいろな用法において不定詞は仮定法動詞または仮定法代用動詞を含む完全節と人気を競い合う。I do not know what to say（どう言ったらよいかわかりません）は，I do not know what I should say と同意であり，I am here to see him（私は彼に会いにきたのです）は，I am here (so) that I may see him と同意である。現代英語では不定詞はこれらの仮定法節よりも一層広く用いられている。

不定詞はまた動詞の -ing 形態と人気争いをしている。われわれは dogs delight to bark and bite（犬は吠えたり人に噛みついたりして悦に入っている）といってもよいし，dogs delight in barking and biting といってもよい。屢々これらの二つの形態は相互交換可能であるが，然し常に可能である訳ではない。ある動詞はこれらの一方を目的語にとり得るが他方を取ることはできない。ある動詞は不定詞を目的語にとることはできないが，目的を表わす副詞的不定詞を後に伴ない，それによって修飾されることは差支えない。

不定詞は時間を表わさない。 he liked to skate, he likes to skate, he would like to skake の3つの例に見られるように，過去・現在・未来を述べるに同一の形態が用いられる。時間は like のような純粋動詞 (true verb) の時制によって示される。

to be seen において見られるように，動詞の過去分詞を後に従える不定詞の to be はその動詞の受動態不定詞と呼ばれる。これは英語における比較的新しい発展形態である。最近まで不定詞それ自身が能動態でもあり受動態でもあった。そして不定詞は， there is a lot to see in Rome（ローマには見る物が沢山ある）の中で見られるように，今日なお受動態の意味で理解されている。然しながらこの明白に受動態的な形態は精密を期する必要がある場合には便利な形態であって， それによって to love and to be loved by me（私を愛し私に愛される）のようなことを述べることができる。われわれはまた，to be seeing（見ている最中）のように進行形不定詞や，to be being seen（見られている最中）のように進行形

受動態を作ることもできる。裸不定詞の単純形を後に伴なう動詞（例えば may）もまた，he may be seen（彼は見られるかも知れない）や，he may be seeing（彼は見ているかも知れない）の中で見られるように，受動態不定詞や進行形不定詞の単純形を後に従えることができる。

完了不定詞（The Perfect Infinitives）

動詞の過去分詞を後に伴った不定詞 to have は，to have seen に見られるように，その動詞の完了不定詞と呼ばれる。それはまた to have been seen に見られるように受動態形や，to have been seeing のような進行形も，また to have been being seen のような進行形受動態形を作ることもできる。この最後の形態は稀にしか用いられないし，文法家の中にはそれは全く用いられないという者もいるが，完全に適当な形態であり，how would you like to have been being scolded all day？（あなたは終日叱られてばかりいたことをどう思いますか）に見られるように，事実折々耳にする。to のない単純形不定詞を後に伴う動詞は，he may have seen（彼は見たかも知れない）のように，完了不定詞を後に伴なう時にも to を省略する。

完了不定詞は，時として完結した動作を，また時として述べられている事柄が事実に反することを示す。we expect to have left by then（その時までには出発しているだろうと思う）の中で見られるように完了不定詞が現在形動詞に続く時にはその完了不定詞は常に完結した動作を表わし，かつまた完了不定詞が過去形の仮定法助動詞に続く時にも完結した動作を表わすことができる。完了不定詞が過去形の叙実法動詞の後に続く時にはその完了不定詞は動作が事実と反することを表わす。Milton が I made him just and right, sufficient to have stood though free to fall（私は彼を正しく造った。落つるは自由ながら立つに足るように）と書いた文の中では，実際には彼は立上らなかったので完了不定詞の動詞に stood を用い，実際に彼は倒れたので fall 付の非断定的表現を用いたのである。完了不定詞のこれと同様な用法が，I thought thy bride bed to have

deck't, sweet maid（ねえ，わたしはあなたの花嫁の寝床を花で飾ってあげようと思っていたのに）の中にも見られる。

he expected to have left（彼は自分が出発しているだろうと思った—実際は出発していなかったのだが—）というような構文は今日なお用いられているが，今日の英語では，事実に反することを述べるには，動詞の中に助動詞の had を用いて即ち過去完了を用いて，he had expected to leave という構文を用いる方が多い。上のものと同じ意味を表わすのに，he had expected to have left といういい方をして二個の形態を同時に組合わせるのは完全な冗語法であり，二重否定構文と同類視されるだけの価値はない。冗語文体（redundancy）は言葉に敏感な人には不快なものである。冗語表現はそれが清楚でないという理由だけでも教養を欠く。

would have, might have などを含む句の後に用いられた完了不定詞は．それと異なる。是等の過去仮定法形態は，if he had come, I would have been pleased（もし彼がきてくれたら私は嬉しかっただろうに）に見られるように，事実に反する条件節に従う帰結節の中で用いられる。事実に反する節（the contrary to fact clause）は，丁度単純形仮定節が単純形不定詞によって置き代えられ得るのと全く同じように，完了形不定詞句によって置き代えられ得る。it would have done you good to have walked in the garden with us の中で，to have walked の部分は，if you had walked の代りをしている。このような完了不定詞は優れた英文作家が用いる確立した文語体であり，he had expected to have left のような冗語構文と混同されてはならない。完了不定詞を would have, might have と同種の動詞句のうち次に示すような動詞句の後に置いて別の構文の中で用いることは誤りではない。would およびある構文をとったイギリスでの話し言葉の中で用いる should は例外であるが，have を後に伴った仮定法助動詞＋過去分詞は事実の反対および事実の両方を表わすが，とに角完結した動作を表わす。即ち he could have asked her to send it や he should have asked her to send it は，事実即ち he asked her を意味することもある。話し言葉で事実の反対即ち he did

not ask her の意味を示すためには先頭の助動詞に強勢を置いて発声する。could や should の後では，he could have asked her to have sent it に見られるように，完了不定詞は，if she had sent it と置き代えることはできないから，いささかも冗語構文ではなく完全に精密なものである。

この事は would have に関しては別であって，それは常に事実に反する陳述を示す。表現技術の上からいえば he would have liked to have left は，he had expected to have left と同様の言語過剰の冗語的表現である。とはいえこれらの二個の表現は実際は同じものではなくて，would have を用いた文では，不定詞を条件節に置き代えることができる性質のものである。ただここで would have の代りに might have を用いたとしたら，その後へ，完了不定詞を用いたなら適切であっただろう。原理的には would have と might have とは別物で，それぞれの表現に従って効果を持つ。従ってこのような意味内容を述べるには he would have liked to have left という方が大多数の人々の耳には自然な言い方として聞える。

分割不定詞 (Split Infinitives)

to quietly walk away（静かに歩き去る）に見られるように，to と動詞の単純形との間に語を挿入することは文法的な誤りであるとする考えは，上手に物を書こうと骨を折る人々が，そのために却って悪文(bad writing)を書いてしまうことが極めて多いという事実に基づくものである。「不定詞を分割すること」("splitting an infinitive") を非とする定則は，現実からいって英語文法の原則に矛盾するし，英語国民の最高の作家達が行っている言語慣習に矛盾している。

「分割不定詞」は比較的新しい構文ではあるが，Sir Philip Sidney, Sir Thomas Browne, Donne, Pepys, Defoe, Samuel Johnson, Burns, Wordsworth, Coleridge, Lamb, Byron, De Quincey, Macaulay, Holmes, Whittier, George Eliot, Carlyle, Browning, Arnold, Pater, Ruskin, Henry James, Hardy, Meredith, Galsworthy, Conan Doyle,

Kipling, Shaw — そして Benjamin Franklin, Abraham Lincoln, Theodore Roosevelt, Woodrow Wilson や, Herbert Hoover などの著作物の中に見出される。

to - 不定詞は実際には, a need to investigate the matter（その事件を調査する必要）に見られるように, 動詞の単純形を目的語として後に従えた前置詞 to である。文法的にいえば, a need for investigating the matter に見られるように, この to - 不定詞は, 動詞の -ing 形態を目的語として伴った前置詞と同種のものと見做し得る。-ing 形態の場合には, a need for secretly investigating the matter（その事件を内密に調査する必要）に見られるように, 修飾語は前置詞と -ing 形態との中間に入るのがよい。われわれが合成動詞句 (composite verbal phrase) を持つ場合には, 修飾語の通常の位置は, he decided he would secretly investigate the matter（彼はその事件を内密に調査しよう決心した）に見られるように, 第一補助語 (the first auxiliary form) と有意味語 (the meaningful form) との中間である。上の二文の何れの場合にせよ, 修飾語は, for investigating the matter secretly と, he would investigate the matter secretly とに見られるように, 完結した動詞的陳述の後へ回すこともできる。然しこうして修飾語が後で述べられる場合にはそれは特別の強勢 (special emphasis) を持つに至る。換言すれば不定詞を修飾する語の取るべき普通の位置は, he decided to secretly investigate the matter（彼はその事件を内密に調査することを決意した）に見られるように, 動詞形態の前であるが然し総ての補助的役目をする語の後である, ということになるであろう。

to - 不定詞は語順の一般的法則に反する一つの例外であって語順の一般的法則のままに扱われることはできない, という考えは, 19世紀後半—分割不定詞が始めて一般的に用いられるに至った時期—に台頭したものである。分割不定詞のこの構文は既に早く14世紀にも見出し得るが, 然し1850年以前においては稀である。というのも文の中で人が不定詞を分割することが何等かの理由で必要であるというような型の文はその頃には稀であっ

たからである。現代英語の顕著な特質の一つは，以前には -ing 形態か，または「節」(clause) が好んで用いられた場所に，不定詞が取って代って極めて頻繁に用いられるようになった，ということである。別言すれは今日われわれが he decided to investigate という表現を寧ろ用いたいと思う場所に，以前の人々は，he decided that he would investigate と言ったのである。

「節構文」(clause construction) においては我々は動詞を修飾させて，he decided that he would secretly investigate と言うことができる。若しも不定詞が節に代って用いられ得るとするならば，不定詞は節が表わすのと同じいろいろな差異を表わすことができなければならない。この条件を満たすためには動詞形態の直前に自由に修飾語（群）を置くことができるという必要が生じてくる。he decided to secretly investigate において，secretly は investigate という語を修飾している。若しも secretly が he の前，または decided の前に置かれているとすれば，それは decided を修飾することになる。若しそれが，he decided secretly to investigate というように，to の前に置かれているとすれば，それは意味の曖昧さを生む。それは investigate を修飾するかも知れないが，恐らくは decided を修飾するものとなるであろう。若しそれが investigate より後部に置かれているとすれば，それは「強勢的」(emphatic) の役目をする。だからして若しも我々が secretly を to と investigate との中間に挿入できないとすれば，節構文で述べられる意味内容を述べるのに不定詞を用いることができなくなる。

英語では，not や never のような否定副詞 (negative adverbs) と，only や scarcely のような限定副詞 (restrictive adverbs) とは，文の中では前方位置へ動かされるという特色を持つ。この種の語は，だからして，he decided never to investigate（彼は決して調査しないことを決意した）に見られるように，to という語の前に位置して，然もなお不定詞を修飾することができる。不定詞を決して分割しないと決意している作家は，否定副詞と限定副詞は例外的に to の前に置かれるが，修飾語は to とい

う語よりも前に置かれることはできないし，若し前に置かれているとすれば，それは不定詞を修飾するのではなくて主動詞（principal verb）を修飾することになる，ということを忘れてはならない。また若しそれが不定詞より後部に置かれているとすれば，それは意図されておらないかも知れない「特別の強勢」（special emphasis）の力を獲得してしまうことになる，ということも忘れてはならない。分割不定詞を用いずに然もなお良い英語を書く唯一の方法は，不定詞の使用を避けることである，と言えることが屢々ある。とは言え，不定詞の増大し行く使用の現実を脇目に見ながらも，なお頑として不定詞を忌避することは，冗漫な悪文の用語過剰に陥いることでしかない。

不定詞を分割することに反対しない人々は，次の二つの事項を記憶しておらねばならない。

(1) 助動詞 be, have や，分詞を中に含む「合成不定詞」（composite infinitive）の中では，副詞の取るべき通常の位置は助動詞の後であってその前ではない。即ち to have always thought（終始考えてきた）が通常の語順であって，to always have thought は，「文副詞」（sentence adverb）のような特別な強勢（special emphasis）を付加する転位（variation）である。

(2) to と動詞形態との中間に入る語の数はいくら多くてもよい。ブラウニングは，a scheme to quietly next day at crow of cock cut my own throat（あすの朝雄鶏のときをつくる鳴き声と共に静かに刃物で私自身の喉を切る計画）と書いている。この構文は，マコーレィが，principles independent of and indeed almost incompatible with, the sentiment of devoted loyalty（献身的忠勤の感情とは縁もゆかりも無く寧ろ実際に殆んど矛盾してさえいる原理）と書いた文の中で見られるように，前置詞とその名詞的目的語との中間に多数の語を入れるのと，まさに比肩する構文である。この構文は折々は用いられてもよいが，それが習癖（mannerism）となる時には，読み手にとっては全く我慢のできないしろものとなる。

(2)

分　詞 (Participles)

分詞 (participle) は動詞状形容詞である。分詞は時には形容詞として，そして時には動詞句 (verbal phrase) を作るのに用いられる。

英語の動詞は二種の分詞を持つ。第一分詞 (the first participle) は，breaking や mending に見られるように，動詞の単純形に -ing を添えることによって作られる。これは時には現在分詞 (present participle) と呼ばれ，また時には能動分詞 (active participle) と呼ばれるが，どちらの呼称も満足なものではない。they were mending the wall (塀が修理中だった) の中で見られるように，(分詞の) 語形は時 (time) を示さないし，現在時制句の中でも過去時制句の中でも用いられる。最近までは分詞は能動・受動の両様の意味を持っていた。it will bear telling (それは話題にのせる値打ちがある)，it is worth seeing (それは見る値打ちがある)，use every man after his deserts and who should escape whipping? (当然受くべき賞と罰とに鑑みて総ての人を用いよ，そうすれば唯がむちうちの刑を避けようとするか) などの中では，分詞は今日なお受動の意味で理解できる。分詞は本質的には (話している現在時においてであろうが，或は別の時においてであろうが) 継続中の動作として考えられた動作を述べる形態であって，動詞 to be の諸変化形と共に用いられて，the box is breaking (箱はこわれかかっている) に見られるように，進行形諸時制 (progressive tenses) を作る。

第二分詞 (the second participle) は broken や mended のような，動詞の3基本形の第三形態である。それは時には過去分詞 (past participle) と呼ばれ，また時には受動分詞 (passive participle) と呼ばれる。それは動詞 to have の諸変化形態と共に用いられて，he has broken the box (彼は箱をこわしてしまった) に見られるように，完結した動作の諸時制を作り，また動詞 to be の諸変化形と共に用いられて，the cup was broken (コップはこわされた) に見られるように受動態を作る。然しなが

ら形態それ自身は時(time)を示さない。それは glorious things of thee are spoken（あなたのおこなった輝く功績は今丁度伝達中です）に見られるように，現在時に用いることができる。また he has broken it に見られるように，能動の意味を持って完結した動作の諸時制に用いられる。本質的には第二分詞は完結した動作を示す動詞の形態である。

having mended（修繕が終ったので）に見られるように，有意味動詞(meaningful verb)の第二分詞を後に伴った分詞 having は，時には第三分詞（the third participle）またわ完了分詞（perfect participle）と呼ばれる。（然し）ここでは完了（perfect）という用語は紛らわしい。何故なら古い時代の文法家達は第二分詞は完結動作を示すという理由でそれを完了分詞と呼んでいたからである。こんな紛らわしい用語が用いられるとしたら，第二分詞を後に伴った being 即ち being mended は，受動分詞(passive participle）と呼ばれても同様に差支えないと思われるが、一般的にはこれには何の呼び名も付いていない。第一第二の両分詞は複合時制(compound tenses）を作るのに用いられることの外に，形容詞として用いられる。a squeezing, wrenching, grasping, scraping, clutching, covetous, old sinner（絞り屋，はぎ取り屋，鷲摑み屋，掠り屋，むしり屋の貪欲な老罪人）という言い方の中では -ing 分詞は形容詞である。この表現の場合のように分詞が名詞の前に位置する時には，分詞は類別機能を持ち我々に彼がどのような種類の罪人であるかを示している。a covetous old sinner, squeezing, wrenching, grasping 等のような言い方で，名詞の後に従う分詞は叙述的なものである。

現在分詞が形容詞として用いられているのか，それとも進行形の動詞形態の一部として用いられているのかを区別することが困難な場合がある。this was distressing to her（これは彼女の心を苦しめるものだった）におけるように， to be の変化形の後に来る分詞と目的語とを結合するために前置詞 to が用いられている場合には，分詞は確かに形容詞である。this was distressing her（これは彼女を苦しめていた）におけるように，目的語が直後に続いている場合には，分詞は文の動詞の一部である。若し

目的語が続いていない場合には分詞は両者のいづれだと判定してもよい。文の表わす意味に関する限りでは，分詞の是等2種の用法の間には殆んど相異は無い。

第二分詞の場合には，形容詞用法と動詞形態用法との間では意味の上で大きな違いがある。cut is the branch that might have grown full straight（切られなければ思う存分すくすくと真直に伸びたであろう枝が切り取られてしまっている）/ And burnéd is Apollo's laurel bough（アポロの月桂樹の大枝が焼かれてしまっている）/ That sometime grew within this learnéd man（それが或る時この博学な人の心の中に宿り成長した）などの中での cut, grown, burned, learned は何れも第二分詞である。learned は明らかに形容詞であり，grown は動詞形態の一部を成すものであるが，然し cut と burned は形容詞であると言ってもよいし，或いは受動態動詞の一部を成していると言ってもよいであろう。今日では人は大抵是等の cut や burned を形容詞だと言うだろう。（文の）動詞句の中に，動詞 to be の変化形を入れ得ない時には，その分詞が形容詞なのか或いは動詞形態の一部なのかの紛らわしさは起らない。分詞が動詞の目的語の直後に置かれていなければそれは動詞形態の一部であり，若し目的語の後に置かれておれば，それは形容詞である。he has written a letter において，written は動詞の一部であり，he had a letter written（彼は手紙を人に書かせた）においては letter を修飾する形容詞である。

分詞が形容詞である場合には，それは this had been very distressing to her（これは彼女にとっては大きな悩みの種であったのだった）におけるように，very や too などの語によって修飾され得る。分詞が動詞形態の一部である場合には是等の語は用いられ得ない。我々は this was very distressing her と言うことはできない。我々が she had been very distressed（彼女はとても悩んでいたのだった）と言えるかどうかは，その分詞を形容詞と見るか或いは動詞形態の一部と見るかにかかっている。

独立主格 (Nominative Absolute)

文法用語としての absolute（絶対的）という語は "free"（自由な）か，

または "independent"（独立の）ということを意味する。"nominative absolute" という表現は，文の残余の部分とは文法的に無関係で，かつ分詞が修飾する名詞またわ名詞相当語句を含むところの分詞句を意味する。例えば that done, we started home（それが済んだので家を出た）という文では done は分詞であり，that はそれによって修飾される語であり，that done が独立主格である。この種の句は，時（time），原因（cause），条件（condition），或いは叙述的情況（descriptive circumstance）を示す縮約節（condensed clause）の力を持ち，常に when that was done（それが為された時に）や，since that was done（それが為されたので）のような節（clause）によって置き換えられ得る。

現在分詞も過去分詞も共にこの「独立主格」の用法で用いられ，I having few friends, my business began to fail（私は友人が少なかったので，私の商売は衰微し始めた）や，the money spent, we went to work again（お金が使い果たされてしまったので我々は再び仕事に就いた）というように言う。この構文は文語体英語（literary English）であることは疑いない。文法家の或る者は "it is good Latin but not good English"（それは良いラテン語ではあるが良い英語ではない）と主張するが，それは恐らくは自然な英語（natural English）でないという事を意味するのだろう。とは言えこのような主張は今日では最早通用しない。形態はラテン語から引継いだもので17世紀までは英語の中には普及しなかったけれども，今日ではそれは完全に自然なものとなってしまっている。the river being high, we were afraid to go on（水かさが増していたので先へ進むことがこわかった）という文には，そのどこを探しても文語的（bookish）に過ぎる所は見当らない。また that settled（それが解決されたので），everything considered（総ての事を考慮してみると），that being the case（そうゆう情況であったので）などは絶えず用いられている。

独立主格のこの構文の中で，分詞によって修飾される語が人称代名詞である場合には，文法規則に従えば主格形態（subjective form）が用いられなければならない（主格（nominative）は主語格 "subjective" を意味し，

代名詞は勿論名詞にも適用される)。この構文は，主格形態がここでは必要であるという理由で独立主格 (nominative absolute) と呼ばれる。

主格でなければならないというこの規則は -ing が用いられる場合には何時でも実際に守られている。she having finished the work, there was nothing for us to do (彼女がその仕事をやってしまって呉れたので我々がする仕事は何も無かった) に見られる通りである。そして maybe he can help, him being a scholar (彼は学者であるので多分救いの手を差し伸べることができるであろう) におけるように，独立句 (absolute phrase) の中で用いられた -ing の前の目的格の代名詞は誤りであると考えられる。また，it's very sad, and him so fond of children (それは大変悲しいことだ，然も彼は子供には全然目が無いんだ) の中では，今度は分詞が用いられず being という語が単に意味されているに過ぎないがこれもまた誤りである。

この規則は単純過去分詞 (simple past participle) の場合には守られていない。Milton はこの独立主格構文で，-ing の前では主格代名詞を用いているが，過去分詞の前では目的格を用いて，us dispossessed (我々は追はれて)；me overthrown (私が敗北を喫して) と言っている。この非文法的構文を用いて，現代の話し言葉でも，him taken care of, we could go on (彼を世話する人があったのでわれわれは先えと行くことができた) のように言うが，この言い方は he taken care of と言うよりも遙かに自然な言い方である。目的格形態を正当化するために前置詞をこの句の前に置いて，with him taken care of というような表現を好む者もある。また主格形態を正当化するために having been を挿入して，he having been taken care of という表現を好む者もある。これらの3様の構文は何れも認容し得る (acceptable) ものである。

前置詞で始まり，かつ -ing 形態を含む独立句 (independent phrase) は独立動名詞句 (absolute gerund phrase) と呼ばれる。今まで述べてきた総ての事項と，またこれから述べる独立分詞句 (absolute participial phrase) に就いての総ての事項は，この動名詞句に就いてもまた言える。

ただ動名詞句の場合には，with him being sick, she had a great deal to do（彼が病床にあったので彼女がしなければならない事が多かった）に見られるように，人称代名詞は常に目的格でなければならぬ，という相異点が残るだけである。

懸垂分詞（"Dangling Participle"）

非常にしばしば分詞句は，分詞が修飾することのできる名詞または代名詞を含んでいないことがある。そのような名詞・代名詞は the children ran into the house calling for her（子供達は彼女の名を呼びながら家に駆け込んできた）（ここでは calling for her という句は children という語を修飾する）に見られるように，文の何処かに存在するのが普通であるが，時には下に掲げる文に見られるようにそのような語が存在しないことがある。it rained hard coming back（家に戻る時雨が激しく降っていた）。これはそれを用いることを嫌う人々によって懸垂分詞（dangling participle）と呼ばれる。この懸垂分詞構文もまた一種の独立構文であるが，主格語を所有しないので，独立主格構文ではない。それは英国生え抜きの英語構文であり，ラテン語からの借物ではない。Chaucer や Chaucer 以前にも以後にも英語国民の総ての大文豪によって使用されてきている。とは言え通常は教科書の場合には非難を受けている。J. Lesslie Hall は，それを「迫害された分詞（"the persecuted participle"）」と呼んでおこうぢゃないかと言っている。

子供達は通常，分詞句は独立主格構文であるか，または文中で容易にそれと判定できる語を修飾するものであるかの何れかでなければならないと，教えられる。knowing as much as you do, the situation is easily explained（君達ができるだけ多くの事を知っているので情況説明は易しい）という表現は文法的に誤っているということを子供達に教えるために，having eaten our lunch, the bus went on to Chicago（われわれの弁当を食べた後でバスはシカゴまで走り続けた）という文を子供達は示される。

「懸垂分詞」を非とする文法規則は有害なものである。そしてその規則を侵害し得ないものと考える者は何びとも良い英語（good English）を書くことはできない。まず第一に言えることは，例外として率直に認容されなければならない二つの型の分詞句があるということである。(1) 独立して，何時でも用いられる数多くの分詞がある。それは寧ろ前置詞の部類に入るであろうし，もしそれが節（clause）を後に従えているならば接続詞の部類に入るであろう。concerning（～に関して），regarding（～に関して），providing（もし～なら），owing to（～のために），excepting（～を除いて），failing（～が無い場合には）などがそれである。(2) しばしば，「添えられていない分詞」(unattached partiple) が，其処に居合わせる誰でも，また全部の人が不定的に主語となるように意図されることがある。facing north there is a large mountain on the right（北を向くと右側に大きな山が見える）や，looking at the subject dispassionately, what evidence is there?（冷静になって問題を見詰めてみると証拠となるようなものは何も無い）などがそれである。これらはこの種の陳述を立言する慣用的表現文句であって，他の構文を用いれば却って不自然な厄介なものとなる。

次に言えることは，懸垂分詞を非とする規則は，われわれがこれらの例外を例外としてそのまま認めるにしても，なおかつ良いものではないということである。分詞の主語を同時に主動詞（principal verb）の主語に仕立てようとするだけのために，文の自然の形態を撚ぢ曲げる必要は毛頭無い。優れた作家達は分詞の規則が禁じているまさにその構文を躊躇なく使用する。lying in my bed, everything seemed so different（寝台にねそべって眺めると凡ゆる物が誠に変った姿に見えた）；taking up, by the merest chance, a finely bound book, it proved to be …（偶然事中の偶然事なのだが余り素的な装丁の本だったんで手に取ってみたらそれは…に過ぎなかった）；thus loaded, our progress was slower（こんな具合に荷が積み込まれたのでわれわれの歩みは前よりのろくなった）；bred up from boyhood in the Custom House, it was his proper

field of activity（子供の時から税関の中で育てられたので税関こそ彼に最も適した活動舞台であった）。

バスが弁当を食べるという構文になっている文は誤りである。それは分詞が懸垂分詞であるからではなく，分詞が bus という語に密着しているので却って懸垂的ではないという理由からである。分詞たるの規則は，分詞句は時・方法・付随の状況の副詞の力を持っており，文中の名詞的要素に結び付けられてはならないと提言すべきである。この規則を無視することは実に大きな文法的誤謬を犯していることになる。それにも拘らずその種の誤謬が過去分詞を後に従えた having を用いる時には，えてして起り勝ちであるということをここに指摘しておかねばならない。分詞の他の構文の場合には誤謬は極めて稀であり，起るとしても主として慣用例文の中でしかない。

（3）

-ing（動名詞形態 the Gerund form）

動詞の -ing 形は，同じ -ing 形を持つ普通の名詞とは別物である。海亀スープ代用のスープの中の犢の頭氏が Alice 夫人に，he has studied reeling, writhing, drawling, stretching and fainting in coils（彼は揺ぎ・身のよぢり・うろつき・背のびと気絶のとんぼ返りを学んだ）と言う時には，-ing は一連の業または技能を指す普通の名詞であり，従ってこれらは概念・習慣・出来事などと同様に物（things）を表わす。実は動詞の -ing 形はいわゆる「物」を指すことはなく，名詞として the stretching of the rope（ロープの張り）と言ったり，時には the reeling man（千鳥足の男）と言ったりする時のように一個の形容詞として特定の動詞によって表わされる動作を述べる形式である。

現代英語では -ing 形が人称代名詞の後に続き，かつそれらの 2 語が動詞や前置詞の目的語である場合にはその代名詞は，do you mind us having secrets？（あなたは我々が秘密を持っていてもよいですか）という文や，do you mind our having secrets？という文の中で見られるように，目

的格形だったり所有格形だったりする。若し人称代名詞とその後に続く -ing 形との2語が文の主語的位置に立っているならば，その人称代名詞は，you going out is no proof that you are well（あなたが外出できるのはまだ健康回復の証拠ではありませんよ）や，your going out is no proof に見られるように，主格またわ所有格の何れであってもよい。-ing を後に伴った名詞および，人称代名詞以外の代名詞は総て，次の例の anything や the lady に見られるように通格（common case）である。there's not the least likelihood of anything having happened to them（何事かが彼らに起っているということは全く有りそうもない），is the lady bothering you any reason for you to come bothering me?（その婦人が君をせついているからといって，それが君が僕をせつきに来る何の理由になるのかね）。

この構文の或るものは，人によっては抵抗を感ずるであろうし，-ing 形の語の前では所有格を用いるのが良いと主張する文法家に非難されるが，然し今日大多数の人々は上に示したルールによって -ing を使用している。だから -ing のこのような用い方は認め得る現代英語として承認しなければならない。

-ing 形を含んだ幾つかの古い構文も今日なお耳に聞かれる。多くの人々は今日なお下に示すような19世紀の構文即ち形容詞的修飾語，即ち of という語を必要とする構文や，或いは属格の先行語を必要とするような構文を或る情況の下では用いて，I thank you for receiving of me（私をおもてなし頂いて有難うございました）や，laws against their worshiping idols（彼らが偶像を信ずることを禁ずる法律）のように言う。これらの構文は話し言葉では用いられており，かつ現代英語よりは文語的なものとされている。17世紀から18世紀に至るもっと古い構文も話し言葉などでは聞かれるが，それ等は然しながら最早標準的なものだとは見做されていない。

いろいろな種類の -ing に就いて語らなくとも，-ing 形の現代的用法を述べることはできる。然し我々が古い構文を用いてみたくなって，これら

の構文のどちらが今日標準的なものであるかを知りたいと思うならば，我々は若干の相異点を知っておらなければならない。19世紀においては -ing の用い方に3様式があり，即ち -ing 形は3つの明らかな働きを持つていると承認されていた。

1. 一つには the worshiping of idols was forbidden に見られるように，-ing 形式は名詞の持つ総ての特質を持っていた。この形式は「動詞状名詞」(the verbal noun) と名付けられていたが，然し今日ではそれは「動名詞」(the gerund) と呼んで，動詞から来た純粋の名詞と区別している。19世紀初期の文法家達はこの種の -ing 形式を，a, the, this, that や，属格または所有格のような限定語が先行している -ing 形式だと定義付けていた。この動名詞形態 (the gerund form) は，その直前に形容詞が来ることはできるが副詞は来ることはできない。the occasional worshiping of idols (正)，the occasionally worshiping of idols (誤)。それはその直後に目的語を伴なうことはできず前置詞 of を置く必要がある。the worshiping idols was forbidden (誤) (但し動名詞の前に no という語が先行する場合に限りこの of は省略してもよい。there was no persuading them (彼らを説得することは不可能だった)。動詞の働を受けて立つ直接目的語 (通常は「物」) だけが，前置詞 of の助けによって動名詞に結びつけられる。the giving of candy to children (正)，the giving of children candy (誤)。

19世紀においては，動名詞は上に示したような構文で，即ち動詞の主語またわ動詞の目的語としてしばしば用いられたが，前置詞の目的語として用いられたのは稀であった。a law against the worshiping of idols (稀)。というのは，これよりもっと簡単な言い方が可能であり，その方が好まれたからである。

2. -ing 形態は形容詞の持つ総ての特質を持つことができる。それが形容詞の特質を持っ時にはそれは「分詞」(participle) と呼ばれる。この形態は20世紀において，19世紀にそれが用いられたと同様に用いられている。分詞は文の不可欠な一部分を受け持つが，形容詞が名詞または名詞相

当語を修飾するのと同じく，それは名詞または名詞相当語を修飾する。それは a laughing girl（笑っている少女），a girl picking cherries に見られるように，名詞の前に来てもよいし，後に来てもよい。分詞によって修飾された人称代名詞は，文中におけるその機能に従って主格であっても目的格であってもよいが，所有格であることは決してない。この制限は名詞や人称代名詞以外の代名詞（即ち指示代名詞・不定代名詞など）の場合にはない。

-ing 形態は文法的に文から独立している句（phrase）の一部となることもできる。generally speaking, girls are a nuisance（一般的に言って娘は厄介物だ）。分詞は副詞によって修飾されることはできるが，形容詞によって修飾されることはできない。a girl occasionally picking cherries（時折桜んぼ採りをやる少女）（正），a girl occasional picking cherries（誤）。そして分詞は，上例の句の中の cherries のように目的語をとることはできるが，動詞それ自身が of を必要とする場合（例えば thinking of her）以外は of を含む句（of-phrase）を伴なうことはない。早い時代には分詞は，a dozen of them picking of his bones（彼に向って不平を持つ十二人もの連中）の中の picking のように of を伴っていたであろうが，然しこれは今日では標準的なものだとは考えられていない。

3.　-ing 形態が用いられる第三の用い方は，there were laws against worshiping idols（偶像を崇拝してはならぬという法律があった）という文の中で見られる用法である。ここでは worshiping は名詞もしくは代名詞を修飾する形容詞ではなくて分詞形容詞の性質の若干を持つている。そしてそれは動名詞が必要とする性質を持っていない。19世紀の文法家達はこの種の -ing 形態を，それが動詞状名詞（verbal noun）または動名詞（gerund）から発生し，単純分詞から発生したものでないところのラテン語の形容詞に似ているという理由で動名詞（"gerund"）と呼んだ。彼らは動詞状形容詞（"gerundive"）を定義して，前置詞の後で用いられるところの動詞の -ing 形態だとした。（今日では gerund（動名詞）という単一語が，verbal noun（動詞状名詞）の代りにも，また上のような -ing 形態

の代りにも用いられている。

動詞状形容詞は副詞によって修飾された。 laws against occasionally worshiping idols(正)。然し形容詞によって修飾されることはできなかった。laws against occasional worshiping idols (誤)。属格 (genitive) 若しくは所有格 (possessive) は形容詞 (adjective) と同種の語であり，旧形を墨守する文法家達は動詞状形容詞は，その前にこれらの属格もしくは所有格を伴ってはならないと主張した。即ち彼らは laws against their worshiping idols を誤りだとした。

動詞状形容詞は，直接目的を後に伴なうことはできたが of を伴なうことはできなかった。以前は然し次のように，後に of を伴うことができた。I thank you for receiving of me (私はあなたが私を御引見下さいますことを有難く存じます)。as to giving of you up (あなたを諦らめることに関して)。これらの古い構文は今日なお耳に聞くが，然し最早標準的なものだとは考えられていない。動詞状形容詞は直接目的語はもちろん間接目的語を後に伴なうことはできた。a rule against giving children candy (このことは現在分詞の場合にも言える)。

-ing の 3 種の形態が 3 つとも次の文の中に起っている。(we will) silence their mourning with vows of returning, but never intending to visit them more (我々は必ず戻って来ますという誓いの言葉で彼等の悲しみを静めるつもりです，二度と彼らを訪れる意志はないのですが)。この文では，動名詞 mourning は動詞 silence の目的語であり，動詞状形容詞 returning は前置詞 of の目的語であり，かつ現在分詞 intending は代名詞 we を修飾している。他にもう一種の動詞状名詞 (verbal noun) 即ち不定詞があり，それもまた動詞の主語ともなり目的語ともなる。そして我々は，上の文の中にこの不定詞もまた to visit の姿で持っており，ここでは分詞 intending の目的語をなしている。

ビクトリヤ朝時代の動詞状形容詞は分詞 (participle) のように扱はれているが，然しそれは本質的には名詞であって常に動詞状名詞 (verbal noun) の含みを持ち形容詞の含みを持たない。それは後に続く名詞を修飾するよ

うに用いられることはできるが，然しそれがそのように用いられる時には，その動詞状形容詞はあたかも for のような前置詞が省略されたかのように，一個の省略された前置詞句の力を持っている。a singing child の singing は分詞であるが，a singing lesson（唱歌の授業）の中の singing は分詞ではない。同様に drinking glasses（飲酒用コップ），growing pains（少年期の急激な成長に伴なう四肢の神経痛または筋肉疼痛），writing paper（便箋）の中の -ing 形の語は動詞状形容詞であって分詞ではない。

ビクトリヤ朝時代の標準英語では，目的語を伴なった動詞状形容詞は動詞の主語または目的語としては用いられなかった。即ち worshiping idols was forbidden や，the law forbade worshiping idols は誤りであるとされていた。この場合には動名詞か，不定詞か，または「節」（clause）のような別の構文が必要であった。現代英語では動詞状形容詞は動詞の主語としては自由に用いられるが，動詞の目的語としては用いられないこともある。

ビクトリヤ朝時代の標準英語では，動名詞の直前に位置する名詞または代名詞は属格か所有格でなければならなかった。この位置に立つ語は常にその動名詞によって表はされる動詞的観念の主語となるものであるが，分詞はこれに反して，語尾変化を持たない名詞や主格の代名詞もしくは目的格の代名詞の後に従うことができる。然し分詞はその前に位置する属格語や所有格語を修飾することはできない。動詞状形容詞の前に位置し行動の主語を示す名詞または代名詞がどのような形態を持つべきであるかは更に複雑な問題である。

19世紀前半において，保守的文法家達は属格もしくは所有格形態は，形容詞はその位置には立てないという理由で，動詞状形容詞の前には位置できないと主張した。Thackeray はこの保守的様式を用いて，I insist on Miss Sharp appearing（私はシャープ嬢が出られることを出張します）と書いて，Miss Sharp's appearing とは書かなかった。Noah Webster はこの旧型墨守様式に反対して，「若し先行する語が動詞的観念の主語で

あるならば属格もしくは所有格が必要である」と主張した。

現代の文法家達は実例の数を数えることによって問題を解決している。この争点を決定するために40年前になされた英国文学についての調査は，1400年から1900年に至る間，動詞状形容詞の前では殆んど常に目的格代名詞よりも所有格代名詞が用いられていたことや，名詞の属格が代名詞の約半数の回数用いられていた。

Webster の方が彼の反対者達よりも英語を聞く良い耳を持っていたことは明らかである。19世紀末までに彼の唱導は標準的なものとして完全に受け入れられ，今日では動詞的観念の主語は属格もしくは所有格の形で教科書に表れている。

然しそうこうするうちに18世紀から19世紀初期の標準構文は既に十分有力なものとなっていた。教育を受けたアメリカ人達が用いていた言葉の今から30年前に為された分析研究の結果は，動詞状形容詞の前では，名詞の通格（common form）が属格より圧倒に多く用いられ，また目的格の代名詞が，所有格代名詞（使用率は48%しかない）よりも好まれたということを明らかにした。現代英語では on Miss Sharp's appearing というよりは，on Miss Sharp appearing という方が普通である。代名詞の場合にはどちらの形も用いられる。我々は意味の相異も強勢もなんら意図せずに，I am surprised at his saying that（私は彼が～と言ったのには驚いている）と言ってもよいし，I am surprised at him saying that と言ってもよい。勿論のことだが，若しも代名詞それ自身が動詞または前置詞の目的語であり，-ing が叙述的分詞（descriptive participle）である場合には，その代名詞は目的格でなければならない。we saw him running（我々は彼が走っているのが見えた）。

以上述べたことは動詞または前置詞の目的語となっている -ing 構文のみについて言えることである。-ing 形態が動詞の主語である場合には，属格の名詞の方を今日なお好ましいと思っている人もある。the children's wanting that surprises me（子ども達がそれを欲しがっているのには驚いた）。然し単純形もまた認められてよいし，多くの人々に好まれており，

the children wanting that surprises me のようにいう。若し名詞それ自身が動詞の主語であり，かつ -ing が叙述的分詞である場合には単純形態のみが用いられ得る。the children, wanting some candy, came into the room（子ども達はアメが欲しくて部屋に入ってきた）。代名詞の場合には，-ing が動詞の主語である時は大抵の人は所有格を好み，their being my friends makes it worse（彼らが私の友人であることが事態を一層悪くさせる）のように言う。然しながら主格形態は，they being my friends makes it worse のように，余りにしばしば有名作家達によって用いられているので標準的なものではないとは言い切れない。改めて言うが，若し代名詞それ自身が動詞の主語である場合には: he, being in a hurry, began to run（彼は急いでいたので走りだした）のように主格形態が必要とされる。然しながらこの種の構文はしばしばは用いられない。

代名詞の場合には，（名詞のように）2形態ではなく，3形態があるので問題が複雑である。文法上の論理が目的格や所有格形態を要求する場所に主格形態がしばしば用いられる。主格の代名詞が，instead of he converting the Zulus, the Zulus chief converted him（彼がズールー族を改宗させたのでなくズールー族の酋長が彼を改宗させた）の中で見られるように，先行する動詞または前置詞に密接している場合には，それは教育ある人々にとっては抵抗を感じさせるものであるが，総ての人々が抵抗を感ずる訳ではない。代名詞と，動詞もしくは前置詞，との中間に多数の語が入ってきて構文が明瞭さを欠く時には大抵の人にとっては主格形態が分り易く，without my interfering with their sleep or they with mine（私が彼らの睡眠を妨げず，また彼らが私の睡眠を妨げずに），（注・前置詞 without と代名詞 they との間に my…or という多数の語が介在するので，their とすると分りにくくなる），that would be a motive for her murdering him, not he her（それが多分彼女が彼を殺すに至る動機であって，彼が彼女を殺す動機ではないだろう），（注・ここでも he を his とすると分りにくくなる）のように言う。

目的格の代名詞もまた主語的位置において聞かれ，me knowing their

names surprised them（彼らの名を私が知っていることが彼らを驚かした），it's no use him wiring back（彼が返電を打っても無駄である）のように言う。この構文は純粋動詞（true verb）の直前では主格の代名詞を用い，それ以外の位置ではどこでも目的格形態を用いるという英語の傾向に従ったものである。この種の文構成は話し言葉（speech）では認められている。言い換えればこの種の文は文法家以外の人なら誰も滅多に注意しないものである。とは言え通常はこれらの構文は印刷にかけられる前に所有格形態に変えられてしまっている。